様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：３２５０７
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｋ２３３６８

研究課題名（和文）ギャンブル障害の維持メカニズムの差異に応じた認知行動療法に基づく支援方法の体系化

研究課題名（英文）Systematization of psychological support based on cognitive-behavioral therapy according to differences in the maintenance mechanisms of gambling disorders

研究代表者
田中　佑樹（Tanaka, Yuki）

和洋女子大学・人文学部・助教

研究者番号：４０８４６７７１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究においては、ギャンブル障害に対する心理的支援の精緻化を目指す一環として、問題行動の維持メカニズムの異なる状態像を規定する個人差要因を検討し、認知行動療法プログラムの体系化を試みた。得られた結果から、ギャンブル障害に相当する者において、睡眠の問題が体験の回避を促し、結果として負の強化の随伴性によるギャンブル行動が維持されることが示唆された。加えて、認知的フュージョンが強いほど適応行動が遂行されにくいことが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ギャンブル障害には問題行動の維持メカニズムの異なる状態像が混在することが示されているものの、それぞれの状態像の特徴に応じた支援方法は十分に体系化されているとは言いがたい現状にあった。本研究の結果から、状態像の差異を特徴づける具体的な個人差要因が得られたことに加え、これらの要因は従来のリラプス・プリベンションに基づく認知行動療法プログラムでは改善されにくい可能性が示唆された。以上のことから、ギャンブル障害に対する支援方法の体系化に際して有用な知見が得られたといえる。

研究成果の概要（英文）：As part of an effort to elaborate psychological support for gambling disorder, the individual difference factors that define different state images of problem behavior maintenance mechanism were examined, and an attempt was made to systematize a cognitive-behavioral therapy program. The results suggest that in individuals with suspected gambling disorder, sleep problems promote experiential avoidance, resulting in the maintenance of gambling behavior due to negative reinforcement. Additionally, the stronger the cognitive fusion, the less likely the adaptive behavior was carried out.

研究分野：臨床心理学

キーワード：ギャンブル障害　認知行動療法　負の強化　体験の回避　認知的フュージョン

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

ギャンブル障害は、当該患者の生活全般に支障を生じるという点において生活適応上の問題性を有するといえる。ギャンブル障害に対する心理的支援として、認知行動療法が問題行動の再発防止に対して一定の効果を有することが示されている（Gooding & Tarrier, 2009）。しかしながら、ギャンブル障害には問題行動の維持メカニズムの異なる状態像が混在することが申請者のこれまでの研究によって明らかにされている（田中他，2020）ものの、それぞれの状態像の認知行動的特徴に応じた支援方法が十分に体系化されているとは言いがたい現状にある（田中他，2018）。

２．研究の目的

ギャンブル障害を呈する者は、問題行動が主に正の強化の随伴性によって維持される状態像（正の強化優位群）と、さらに負の強化の随伴性も加わって維持される状態像（正負両方優位群）に大別されることがこれまでの研究によって示されている（田中他，2020）。したがって、ギャンブル障害に対する心理的支援の精緻化を目指す一環として、(1) 問題行動の維持メカニズムの異なる状態像を特徴づける個人差要因を同定し、(2) その個人差要因に応じた効果的な技法を明らかにすることによって認知行動療法プログラムの体系化を試みることを目的とした。

３．研究の方法

上述の目的を踏まえて、以下の研究を実施した。いずれも所属機関における人を対象とする研究に関する倫理審査委員会による実施承認を得た。

【(1) 問題行動の維持メカニズムの異なる状態像を特徴づける個人差要因の同定】

①まず、コミュニティサンプルを対象として、負の強化の随伴性によってギャンブル行動が維持されるに至るメカニズムの検討を行った。具体的には、リサーチ会社にモニター登録をしている者のうち、何らかのギャンブルを週に 1 回以上行うと回答した者を対象として質問紙調査を実施し、1,000 名分のデータが得られた。

②また、適応行動の遂行に影響を及ぼす認知行動的要因の検討を行った。具体的には、本人および主治医から研究参加への同意が得られたギャンブル障害患者を対象とした実験を実施した。しかしながら、新型コロナウイルス感染症の流行に伴う緊急事態宣言が発令されていた期間中は、研究協力先の医療機関におけるデータ収集を中止せざるを得なかったため、データ分析に際して十分なサンプル数の確保に至らなかった。そこで、代替策として、リサーチ会社にモニター登録をしている者のうち、何らかのギャンブルを週に 1 回以上行うと回答した者を対象として質問紙調査を実施し、1,000 名分のデータが得られた。

【(2) 個人差要因に応じた効果的な技法の検討】

①まず、これまで実施されてきたリラプス・プリベンションに基づく認知行動療法プログラムが問題行動の維持メカニズムの異なる状態像を特徴づける要因に対してどの程度の効果を有するかの検討を行った。具体的には、医療機関において実施されているリラプス・プリベンションに基づく集団認知行動療法プログラムの参加者のうち、研究参加への同意が得られ、プログラムのすべての回に出席した 9 名分のデータが得られた。

②また、個人差要因に応じた効果的な技法としてマインドフルネス技法を取り入れた認知行動療法プログラムの効果の検討を行った。具体的には、医療機関において実施されているマインドフルネス技法を取り入れた集団認知行動療法プログラムの参加者のうち、研究参加への同意が得られ、プログラムのすべての回に出席した 5 名分のデータが得られた。

４．研究成果

【(1) 問題行動の維持メカニズムの異なる状態像を特徴づける個人差要因の同定】

①負の強化の随伴性によってギャンブル行動が維持されるに至るメカニズムの検討として、コミュニティサンプルを対象とした質問紙調査によって得られたデータの分析を行った。具体的には、ギャンブル障害のスクリーニング尺度である修正・日本語版 South Oaks Gambling Screen（SOGS：斎藤，1996）の得点に基づいて群分けを行い、多母集団同時分析を実施した。その結果、SOGS の得点がカットオフを超えた群において、睡眠の問題が不快な私的出来事からの回避である「体験の回避」を促し、心理的ストレス反応を高めることによって負の強化の随伴性によるギャンブル行動が維持されるというメカニズムが示唆された。

②さらに、適応行動の遂行に影響を及ぼす認知行動的要因の検討として、別の質問紙調査によって得られたデータの分析を行った。具体的には、SOGS の得点に基づいて群分けを行い、群ごとに認知行動的要因の指標と適応行動の指標との相関分析を実施した。その結果、SOGS の得点がカットオフを超えた群においては、現実と認知を同一のものであると認識してしまう傾向である「認知的フュージョン」が強いほど適応行動が遂行されにくいことが示唆された。

【(2) 個人差要因に応じた効果的な技法の検討】

①まず、問題行動の維持メカニズムの異なる状態像を特徴づける要因に対するリラプス・プリベンションに基づく認知行動療法プログラムの効果の検討として、プログラム参加前と参加後におけるギャンブル障害患者の体験の回避と心理的ストレス反応の変化について t 検定を実施した。その結果、いずれも有意差は認められなかった。

②また、マインドフルネス技法を取り入れた認知行動療法プログラムの効果の検討として、①と同様の分析を実施した結果、いずれも有意差は認められなかった。しかしながら、分析対象者が 5 名とごく少数であったことから、結果の解釈には留意が必要であると考えられる。

引用文献

Gooding, P., & Tarrier, N. (2009). A systematic review and meta-analysis of cognitive-behavioural interventions to reduce problem gambling: Hedging our bets? *Behaviour Research and Therapy*, *47*, 592–607.

斎藤 学（1996）．強迫的（病的）賭博とその治療――病的賭博スクリーニング・テスト（修正 SOGS）の紹介をかねて――　アルコール依存とアディクション，*13*，102-109.

田中 佑樹・野村 和孝・嶋田 洋徳（2018）．ギャンブル障害に対する認知行動療法の研究と実践に関する今後の展望――合法的に営まれるギャンブルに焦点を当てて――　*Journal of Health Psychology Research*，*30*，179-186.

田中 佑樹・野村 和孝・嶋田 洋徳・大石 裕代・大石 雅之（2020）．ギャンブル障害における問題行動の維持メカニズムの差異に基づく状態像の分類――通院患者とコミュニティサンプルを対象とした重症度の連続性に基づく検討――　行動科学，*58*，105-117.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 田中 佑樹・野村 和孝・嶋田 洋徳・大石 裕代・大石 雅之	４．巻 58
２．論文標題 ギャンブル障害における問題行動の維持メカニズムの差異に基づく状態像の分類――通院患者とコミュニティサンプルを対象とした重症度の連続性に基づく検討――	５．発行年 2020年
３．雑誌名 行動科学	６．最初と最後の頁 105-117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 田中 佑樹・野村 和孝・嶋田 洋徳・中川 桂子・小柴 梓・菅野 真由香・大石 泰史・大石 裕代・大石 雅之	４．巻 47
２．論文標題 ギャンブル障害患者に対するリラプス・プリベンションに基づく集団認知行動療法の効果――ギャンブル行動と適応状態を指標とした検討――	５．発行年 2021年
３．雑誌名 認知行動療法研究	６．最初と最後の頁 319-329
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24468/jjbct.20-005	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 田中 佑樹・野村 和孝・嶋田 洋徳・荻島 大凱・大石 裕代・大石 雅之
２．発表標題 リスク状況下におけるセルフ・コントロールがギャンブル障害患者の適応状態に及ぼす影響
３．学会等名 日本心理学会第84回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 田中 佑樹・野村 和孝・嶋田 洋徳・秋葉 杏樹・伊藤 里菜・大石 裕代・大石 雅之
２．発表標題 リスク状況における反応の変容を意図した集団認知行動療法の適用がギャンブル障害患者の適応状態の改善に及ぼす影響
３．学会等名 日本認知・行動療法学会第46回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 日本健康心理学会研究推進委員会・金井 嘉宏・田中 佑樹・森石 千尋・後藤 晶・藤本 志乃
２．発表標題 パンデミック下における研究方法――コロナ禍における研究・臨床実践を踏まえて――（研究推進委員会企画ワークショップ）
３．学会等名 日本健康心理学会第34回大会（招待講演）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計2件

１．著者名 日本認知・行動療法学会（編）田中 佑樹・嶋田 洋徳	４．発行年 2019年
２．出版社 丸善出版	５．総ページ数 828
３．書名 認知行動療法事典（分担執筆：「ギャンブル障害」、「集団認知行動療法（グループワーク）の活用」）	

１．著者名 日本健康心理学会（編）田中 佑樹・嶋田 洋徳	４．発行年 2019年
２．出版社 丸善出版	５．総ページ数 746
３．書名 健康心理学事典（分担執筆：「ストレスコーピング」）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関